駒田好洋の晩年

――セカイフイルム社の活動とその広がり――

上　田　　学

1. はじめに

演劇博物館が、開館十周年を迎えた 1938（昭和 13）年に発行された館報『演劇博物館』には、次のような文章が掲載されている。

> これまでは主力を演劇に注いできたものゝ、姉妹藝術たる映畫の爲めの博物館としても亦其の擴充を期したく、實は當初から映畫部も劇藝術の重要部門として、創設者坪内逍遙博士も、これが整備を期待されたのだつた（中略）今秋十周年を迎へんとするに臨み、これが實行の諸準備も整つたので、此際特に斯界の有力なる方々の御協力を請ひ、演劇の博物館たると同様、映畫の博物館としても其の目的を實現し、現代に於ける演劇文化の記錄を完全ならしむると同時に、我が映畫藝術の發展の一助ともなるやうにしたい。（中略）この趣旨に賛同されて、故駒田好洋氏のセカイフイルム社（責任者加藤敏一氏）よりは既に故人蒐集の歴史的意義深き全資料の御寄託を得たことを皆様と共に喜び度い。[1]

その後の演劇博物館が、上山草人、稲垣浩、市川右太衛門、長谷川一夫、千葉泰樹、森繁久彌、中村公彦、佐田啓二、小林悟、篠田正浩、大和屋竺など、映画人の旧蔵資料を中心に、「映畫の博物館」としての機能を充実させていったのは、よく知られているとおりである。そのようなコレクションの先駆となり基礎となったのが、このとき寄贈された駒田好洋の旧蔵資料であった。[2]

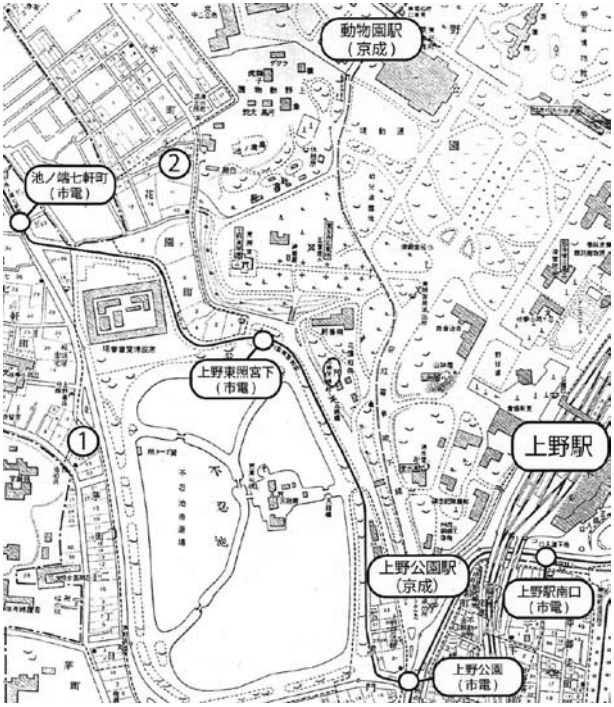
駒田については、近年、永嶺重敏『怪盗ジゴマと活動写真の時代』（新潮社、2006 年）や前川公美夫『頗る非常！　怪人活弁士・駒田好洋の巡業奇聞』（同、2008 年）、あるいは企画展「ニッポンの映像―写し絵・活動写真・弁士―」（早稲田大学坪内博士記念演劇博物館、同年）などで紹介され、日本における初期映画研究の隆盛とも相俟って、あらためて関心を集めている。しかし、駒田が晩年に経営し、没後に演劇博物館へ旧蔵資料を寄贈した、前述のセカイフイルム社については、数多の回顧談を残した駒田もほとんど言及しておらず、現在までその全体像は十分に把握されていない。本稿の目的は、駒田旧蔵のスクラップブックに収録された新聞の記事などを参照しながら、その活動の一端を明らかにすることにある。このことが重要なのは、現在まで多くが失われた、日本で上映された

無声映画や、その関連資料を、いわば在野の「映畫の博物館」として保存してきたセカイフイルム社に、あらためて脚光を当てることができると考えるからである。それはまた、「映畫の博物館」としての演劇博物館のコレクションが、いかに形成されたのかを辿ることにもなるだろう。

なお、駒田旧蔵のスクラップブックは、演劇博物館、および田中純一郎旧蔵資料を所蔵する太田市立新田図書館の二箇所に、合計9冊の現存が確認されている[3]。このうち、表紙に「42　貼込帖」のラベルが付された新田図書館所蔵のスクラップブック（以下、新田所蔵分）と、「43　貼込帖」の番号が付された演劇博物館所蔵のスクラップブック（以下、演博所蔵分）に、セカイフイルム社に関する新聞や小雑誌の記事などが収録されている。これらのなかには、現在では原資料を確認することのできない貴重な記事も含まれている。上記の資料を中心としながら、本稿ではセカイフイルム社の活動の一端を追っていきたい。

2. セカイフイルム社の概要

セカイフイルム社の設立時期については、新田所蔵分を調査した前川公美夫が、1924（大正13）年であると推定している[4]。また駒田自身も、同年にセカイフイルム社を設立したと回想している[5]。同時代の資料からも、たとえば『キネマ旬報』誌上におけるセカイフイルム社の記載は、管見の限り、1925（大正14）年1月1日発行（印刷納本は1924年12月29日）の181号における、「セカイ・フィルム商社」による「謹賀新年」の広告掲載が初出である。こうした点から、少なくとも1924年までに、駒田が同社を設立していたことは確かである。



『大東京三十五区区分詳図集成』（地形社、1941年）より作成。

セカイフイルム社の立地については、『キネマ旬報』誌上の上記広告で、「東京市下谷區芽町二丁目二十五番地」との記載がみられる（図①地点）。ただし、『日本映画事業総覧』昭和三・四年版（国際映画通信社、1928 年）に掲載された広告では、「東京市下谷區上野花園町一六番地」との記載がみられ（図②地点）、以降は上野動物園裏の同住所が用いられている。この点について、当時の地図を参照すると、不忍池や常設博覧会場に遮られた立地から、その北東へと、わずかに上野駅や、京成電車、東京市電の停車場に近い場所へ移転している。移転の理由は不明であるが、セカイフイルム社が業務としてフィルムの貸出をおこなっていた関係上、その輸送上の利便性を図った可能性が考えられる。

なお、『日本映画事業総覧』の後続誌である『国際映画年鑑』に、セカイフイルム社の情報が記載されるのは、1934（昭和 9）年に発行された昭和九年版までのことである。次号から記載がみられなくなるのは、社長を務めていた駒田好洋が、翌年の 1935（昭和 10）年に没したことに関連すると考えられる。ただし、その後の 1937（昭和 12）年に、セカイフイルム社が製作した『不滅乃木』が、東京、名古屋、京都、大阪、さらに大連などで公開され[6]、駒田没後も会社自体は存続していた。少なくとも、上記を再編集した、セカイフイルム社製作の『聖将乃木伝』が公開される 1940（昭和 15）年まで、同社の活動は続いていたと考えられる。

また、セカイフイルム社の名称については、いくつかの異動が確認されている[7]。たとえば、『日本映画事業総覧』に記載された表記だけでも、大正十五年版が「世界ヒルム」、同広告が「世界フィルム商社」、昭和二年版が「セカイ・フイルム社」、同広告が「セカイ・フィルム社」となっている[8]。ただし、昭和三・四年版は、本文および広告とも「セカイフイルム社」となり、以降は同表記で統一されている。この点から、本稿ではセカイフイルム社の名称を用いる。

ところで演博所蔵分の前半は、1925（大正 14）年に再公開された、『ジゴマ』に関する記事を中心に収録されている。従来、セカイフイルム社に関する数少ない先行研究で、同社はもっぱら、かつて駒田が巡業で上映したフィルムを、興行者に貸し出すために設立されたと考えられてきた[9]。『ジゴマ』は、まさしくそれに該当するフィルムであった。駒田は、『ジゴマ』のプリントを 1912（明治 45）年に福宝堂から入手し、静岡、名古屋、広島、呉、福岡、熊本、長崎、鹿児島、佐賀、唐津、久留米、岡山、日向、松山、高知などの地方都市で、巡回興行を開催した[10]。同年中に『ジゴマ』が、警視庁の禁止処分が出された東京をはじめ、内務省警保局の通達を受けた各府県で上映禁止になったことはよく知られているが[11]、1925 年になって、駒田は『ジゴマ』を『探偵ポーリン』に改題し、東京市内の映画館に配給している。

> 駒田好洋氏の經營するセカイ、フヰルム社の倉庫の中には、往時のフアン連を熱狂させた、それこそ寶玉の如き珍映畫名映畫がどれ程堆く埋まれてあるか判らい[ママ]。（中略）その中の一つ、佛國エクレール社の作品で「名探偵ポーリン」がある。これは映畫界の搖籠時代に於て、世界を驚嘆せしめた大活劇。そして當時の我國に於て『ジゴマ』

として世間に騒がれた名映畫である。（中略）此の映畫が上映許可されると聞くや淺草公園では日本館の太田團次郎氏と生駒雷遊氏と二人に依つて權利獲得の爭奪戰が行はれ、その結果生駒氏は數千圓を投じてこれを八日より自己經營の千代田館及芝園館へ上映する運びとなつたと云ふ。[12]

上記で言及されている、浅草公園六区の千代田館と芝園館に加え、演博所蔵分には、本郷区浅嘉町の駒込館で21日から[13]、麻布区広尾町の広尾キネマで23日から[14]、上野広小路の鈴本キネマで2月6日から[15]上映された際のチラシも所収されている。

ところで、上記の広尾キネマのチラシには、説明部の「應援」として、大蔵貢の名前がみられる。大蔵貢はいうまでもなく弁士から日活専務を経て、戦後は新東宝や大蔵映画の社長を務めた人物である。広尾キネマは、彼が最初に経営した目黒キネマに続き、この時期に大蔵が買収している[16]。先の引用文中に、千代田館と芝園館が、弁士の生駒雷遊によって経営されていたことが触れられているが、鈴本キネマのチラシにも、弁士の加志田松緑による経営と記されている。

このように、セカイフイルム社によって配給された『ジゴマ』が、映画会社の系列館ではなく、弁士が経営する独立の映画館で上映されたことは興味深い。同時代の映画をめぐって、製作者の側ではなく、興行者の側に存在したと思われる紐帯を、そこに読み取ることができるからである。この点を踏まえながら、次節では旧来の映画を貸し出すこととは別に、セカイフイルム社がおこなっていた活動の新たな側面について述べていきたい。

3. セカイフイルム社の活動

『日本映画事業総覧』昭和二年版に、セカイフイルム社が貸出用に所蔵していた映画一覧が掲載されている（論末表参照）。ここで注目したいのは、その大半が、1920年代に製作されている点である。駒田が最初に地方で映画興行を開催したのは、日本に映画が輸入された翌年、1898（明治31）年のことである[17]。もしセカイフイルム社が貸し出したプリントが、かつての巡業で上映されたものであるならば、それ以降の1900年代から1910年代の時期のものが中心になるはずである。ここから考えれば、セカイフイルム社が貸し出していたフィルムは、必ずしも先行研究で述べられてきたように、すでに駒田が巡業で上映した映画だけではなく、新たに輸入された映画も含まれていたと考えられる。

この点に関して、駒田はセカイフイルム社を設立した後の活動として、次のような回想を残している。

外畫の直輸入は手輕に行かないので、支那邊りの外畫を買ひに行く事にした。（中略）在支の外人がアメリカ映畫を三年一期で取るが一年しか使はぬ。殘る二年を損料で吾々に使はせるといふ譯である。（賃貸といつても品物は返さないが）此賃貸料はザックバランに白狀すると一尺三錢平均であつて、それに關税や運賃を加へても五錢

位にしかならない、だから七巻のもの一本四百圓足らずで手に入つたのである。（中略）「征服の力」が當時東京第一の全盛を極めてゐた武藏野館へ賣り込んだ時の事だが、角間啓二氏が指を三本出して是でドーダといふから、それちやあんまりひどいといふと、あとさき二本つけて七、八千圓であげなくちやならないからとの話、三本指は三百圓だと早合點した私は桁違ひの三千圓だと分つた。（中略）「征服の力」一本で二萬圓斗りの金をあげた。實に古手拭で五十兩といふ川竹のセリフ其儘のボロイ話だつた。[18]

このように、セカイフイルム社は、中国ですでに上映された映画を輸入し、それを国内で配給するという活動もおこなっていたのである。[19]

また同社は、輸入した映画に加えて、独立プロダクションが製作した映画も配給していた。たとえば、高松豊次郎の活動写真資料研究会が製作した、『昭和の輝き』（荒川清監督、1927年）[20]や、国華映画社が製作した『河西訓導』（阿利加邦平監督、1927年）[21]は、セカイフイルム社がプリントの配給を担った。

以上のことから、セカイフイルム社が、かつて巡業で上映した旧来のプリントを貸し出すのみならず、新たに映画の輸入や配給も手掛けていたことが理解されるだろう。そうしたセカイフイルム社の活動のなかで、とりわけ映画史上で重要だと考えられるのが、全日本映画業組合の結成であった。その設立の経緯について、『やまと新聞』の記事は、次のように述べている。

大日本活動寫眞協會の態度に反抗して起てる駒田好洋氏梅屋庄吉氏等が主唱となりこれに對抗するべく全日本映畫業組合を起し去る十六日午後六時から芝浦いけすに於て發會式を上げた。（中略）駒田好洋氏は語る大日本活動寫眞協會に入つてゐるのは七十からある會社の中僅か十三社で他は巨額の會費及び入會金の負擔に絶[ママ]えない者である。協會が内務省に特別の諒解の下に事務を處理して行く事になると協會に加盟の出來ない小會社は非常に不利な立場に置かれる。協會は映畫界全般の發展の爲に盡してゐるのではなく　巨額の　會費を支拂ひ得る大會社の爲めにのみ力を注いでゐるのである。それに特別の援助をしてゐる、内務省の態度が肯けない。我々は此際不遇な立場に置かれてゐる弱者の爲に敢然立つて利益の保護をする決心である。[22]

1925（大正14）年5月に内務省令10号で公布され、同年7月に施行された「活動写真「フイルム」検閲規則」は、内務省警保局警務課によるフィルムと説明台本の検閲を、映画会社に課すものであった。[23]このような検閲制度に対処するため、日活や松竹キネマ、帝国キネマ演芸、東亜キネマ、パラマウント映画、日米映画、ユナイテッド・アーティスツ、ユニバーサル・ピクチャーズ、ファースト・ナショナル、スターフィルムといった、国内外の主要映画会社は、同年に大日本活動写真協会を結成している。[24]しかし、上記の引用文中にあるように、これに参加できなかった中小の映画会社は、大きな負担を強いられ

ることになった。このような動向に対抗し、駒田好洋を組合長として結成されたのが、全日本映画業組合であった。

それでは、全日本映画業組合には、どのような映画人や映画会社が参加していたのだろうか。『国際映画年鑑』昭和九年版には、組合長の駒田好洋と組合顧問の梅屋庄吉をはじめ、組合員に東和商事合資会社の川喜多長政、大蔵興行本部の大蔵貢、フジワラ・フイルム・ラボラリーの藤原幸三郎、ほかにも小型映画の孔雀活動カメラ店や、映画輸入のヤマニ洋行などが名前を連ねている[25]。梅屋や藤原のような映画草創期からの映画人がいる一方で、東和商事やヤマニ洋行のような、同時代における外国映画の輸入に大きな役割を果たしていた映画会社も参加していることは、注目に値するだろう。たとえば1927（昭和2）年の大正天皇大喪儀において、大日本活動写真協会や新聞各社と「御大喪儀活動寫眞謹寫團」を結成するなど、全日本映画業組合は、同時代の映画界において一定の影響力をもった団体であったと考えられる[26]。

ただし、全日本映画業組合は、『国際映画年鑑』昭和十一年版には掲載されていない。これは、組合長を務めた駒田が前年に没したことや、トーキー化にともなう映画界の大規模な再編という状況が、全日本映画業組合のような、中小の映画会社の連合体が継続していくことを困難にしたと考えられる。その実態は不明な点も多く、あらためて調査を進める必要があるが、いずれにせよ駒田およびセカイフイルム社は、全日本映画業組合における中心的な存在であった。駒田が巡業を終えた晩年にも、同時代の映画界に大きな影響力をもっていたことの一端が、そこに示されているのではないだろうか。

4. おわりに

本稿で述べてきたように、セカイフイルム社は、かつて駒田が全国各地を巡業した際に上映した、旧来のプリントを配給するのみならず、新たな映画の輸入や配給をも手掛けていた。またセカイフイルム社を中心に、全日本映画業組合が結成されるなど、その活動は同時代の映画界においても重要なものであった。それは、映画草創期の巡業ばかりが取り上げられてきた駒田が、無声映画期を通じて、映画界で活躍の場を広げていたことを示す根拠として、位置づけることができるだろう。

ところで新田所蔵分には、以下のような興味深い記事が収められている。

> どこの國にも繪畫彫刻の保存を目的とした美術館はある。／典籍の爲には圖書館があり、古い器物を藏めるのには博物館がある。／ところが、第八藝術と稱せられる映畫の爲には博物館が設けられたとは今日までなかつた。／先年一度この種の設備の必要が説かれたことはあり、圖書館がビブリオテークと呼ばれるところから、映畫保存の目的で建てられるものをキノテークと呼んではどうかと云はれたものである。／しかし、日本では時期尚早とみえてこの説はいつか忘れられてしまつた。／然るに最近フランスでは、古い映畫を保存する博物館が出來た。／しかも、それは國立であつて美

術省に属してゐるものである。／場所は巴里の日本大使館の直ぐ脇のトロカデロ館の一部で、その名を國立映畫博物館（シネマテーク・ナシヨナル）と呼ぶ。[27]

實は私もかなり前から映畫の保存といふことを念頭に入れてゐた。昨年、日頃から御懇意に願つてゐる映畫の專門家 KI 氏にふとその話をしてみると、割紀的な映畫「ジゴマ」を初め幾多の映畫を所藏される同氏は非常に賛成せられた。／そして業界に最も古い過去を有してゐる KI 氏は一つ古い映畫を捜す役目を引受けやうと云はれた。[28]

記事中に「國立映畫博物館（シネマテーク・ナシヨナル）」とあるのは、立地から判断してシネマテーク・フランセーズを示すものと考えられる。上記の記事は、雑誌名および発行日の欄外記述がみられず、文中にある「專門家 KI 氏」など、詳細は不明であるが、シネマテーク・フランセーズの設立が、駒田没年の翌年にあたる 1936（昭和 11）年であることを踏まえれば、駒田以外の人物により、スクラップブックに貼付されたものと思われる。結果的に、シネマテーク設立の翌々年にあたる 1938（昭和 13）年、演劇博物館へ駒田の旧蔵資料が寄贈されることになるが、それはまた同時に、国際フィルムアーカイブ連盟（FIAF）の発足した年でもあった。演劇博物館が「映畫の博物館」としてのコレクションを有しはじめた時期は、国際的な映画保存運動の高まりとも、重なり合うものだったのである。

このように、晩年までの長きにわたる駒田の活動は、単なる映画草創期の興行師という立場にとどまらない、幅広さをもっていた。いずれにせよ、これらは規模の大きな映画会社を中心とした新聞や映画雑誌からの視点では、決して明らかにされえなかった映画史の一側面である。彼が残したスクラップブックに収められた、バックナンバーの大多数が失われている小雑誌の記事によって、新たな映画史の一端が少しずつみえてきたのではないだろうか。

付記

本研究は、文部科学省「特色ある共同研究拠点の整備の推進事業」A09351900（早稲田大学演劇映像学連携研究拠点）の 2010 年度公募研究「説明台本を基礎とした弁士の機能に関する総合的研究」（研究代表者：上田学）において実施した、駒田好洋の孫にあたる駒田好二氏および鈴木雄三氏への聞き取り調査（8 月 28 日、於早稲田大学 22 号館）の成果の一部である。長時間にわたりご講演いただいた駒田氏、ならびに好洋の北海道巡業についてご解説いただいた前川公美夫氏をはじめ、研究分担者・協力者（今田健太郎氏、碓井みちこ氏、大久保遼氏、小川佐和子氏、大傍正規氏）、外部参加者（井家上隆幸氏、羽鳥隆英氏、森重良太氏）各位に、深謝申し上げます。

（表）セカイフイルム社貸出フイルム一覧（1925 年）

	邦題	原題	監督	主演	（参考）製作年
1	ビスマルク	Bismark（ママ）	リヒアルト・シヨツト	フランツ・ルドンウイツヒ	1914
2	征服の力	Conquering Power	レツクス・イングラム	ルドルフ・ヴアレチノ（ママ）	1921
3	復讐のアルプス	Hearts Are Trumps	レツクス・イングラム	アリス・テリー	1920
4	太陽兒	Burning Day light	エドワード・スローマ（ママ）	ミツチエル・ルイス	1920
5	海の雄叫び	Mutiny of the Elsinor（ママ）	エドワード・スローマン	ミツチエル・ルイス	1920
6	赤熱の十字架	Right of Way	ジヤツク・デイロン	バート・ライテル	1920
7	戀の魔神の前に	Idol Dancer	デヴイツド・グリフイス	クラリン・セイモアー	1920
8	彼の學生時代	Old Swimming Valle（ママ）	ジヨセフ・ドグラス	チヤールス・レイ	1921
9	女は遂に	One Week of Love	ヂヨルジユ・アジヤンボー	コンウエー・タール	1922
10	自由結婚	Common Law	ヂヨルジユ・アジヤンボー	コリン・グリフイス	1923
11	デセプシヨン	Deception	エルンスト・ルビツチ	エミール・ヤニングス	1920
12	世界の心	Heart of the World	デヴイツド・グリフイス	リアン・ギツシユ（ママ）	1914
13	ジゴマ	Zigoma（ママ）	（空欄）	アルキエール	1911
14	深夜の警笛	Midnight Patrol	アルヴイン・ウイラツト	サーストン・ホール	1918
15	禁酒の誓	Enterprises	アル・サンテル	ビリー・メーソン	1920

※『日本映画事業総覧』昭和二年版、国際映画通信社、1925 年、424–425 頁。製作年および括弧内以外の表記は原文に拠る。

注

1 「二大計画（その二）映画資料の整備に就いて」『演劇博物館』8 号、1938 年 5 月、9 頁

2 注 1 によれば、その内訳は以下のとおりである。

一、最初の和製映寫機　一個
一、明治三十八年輸入のエヂソン映寫機　一個
一、大正六年輸入のエヂソン映寫機　一個
一、オデツセー大看板　二本
一、ビスマーク大看板　一本

一、道成寺のビラ　一枚
一、日本最初の西洋辻ビラ　一枚
一、最初の引札　一枚
一、殿下台覧の辻番付　一幅
一、今上陛下御大典撮影書類　一束

上記のうち、『ニッポンの映像展―写し絵・活動写真・弁士―』（碓井みちこ編、早稲田大学坪内博士記念演劇博物館、2008年）において、「最初の和製映寫機」が31頁、「明治三十八年輸入のエヂソン映寫機」と「大正六年輸入のエヂソン映寫機」が30頁、「オデツセー大看板」と「ビスマーク大看板」が41頁、「道成寺のビラ」が29頁、「殿下台覧の辻番付」が25頁に、図版入りで紹介されている。

また演劇博物館の記録によれば、24頁の「駒田好洋著『活動写真説明書　附エジソン氏伝』」、および26頁の「エディソン肖像のヴァイタスコープポスター」も、戦後の1957（昭和32）年7月に、加藤敏一から購入している。碓井みちこ氏（関東学院大学専任講師）よりご教示いただいた。

3　前川公美夫『頗る非常！怪人活弁士・駒田好洋の巡業奇聞』新潮社、2008年、33-34頁
4　同上、412頁
5　駒田の回想は以下である。なお同資料については、碓井氏にご教示いただいた。

> 段々常設館は増加する一方で是に對抗するのに骨が折れる様になり、又當初の（洋画と洋楽を普及させるという―引用者）目的も達したので大正十三年に三十年間の映畫行脚をサラリと捨て、駒田好洋大活動團はセカイフイルム社と看板を塗りかへ商人になつたのである。
>
> （駒田好洋「映画十五年走り書き」『キネマ旬報』1934年9月1日、52-53頁）

6　広告「不滅乃木」『キネマ旬報』603号、1937年3月1日
7　注4に同じ。
8　好洋の孫にあたる駒田好二氏が、2010年に演劇博物館に寄贈した、フィルム輸送用のセカイフイルム社の荷札には、「世界フイルム社」との記載がみられる。
9　たとえば田中純一郎は、「巡業が衰微してからは、上野動物園裏の自宅でセカイフィルム社を経営し、所蔵の日露戦争実写や「ジゴマ」などのフィルムを賃貸した」と述べている（『国史大辞典』第6巻、吉川弘文館、1985年、10頁）。なお、このほかの研究として、牧野守が、1928年前後の検閲申請の「代弁業務にはセカイフヰルム社（駒田好洋）、受検代弁社（加藤貞利）、野坂商会（野坂光輝）、ヘンリー商会（片柳登司）、帝国フィルム倉庫試写所（泉本祐治・大沢軍平）」があったと指摘している（「復刻版　映画検閲時報　解説」『復刻版　映画検閲時報　別冊』不二出版、1986年、22頁）。こうしたセカイフイルム社の別の側面については、あらためて次節で検討したい。
10　永嶺重敏『怪盗ジゴマと活動写真の時代』新潮社、2006年、78-84頁
11　同上
12　「歴史的価値ある仏国映画　「ジゴマ」が世に出た」『活動新聞』1925年1月9日（演博所蔵分2頁所収）。なお雑誌名および発行日は、演博所蔵分の欄外記述による。以下、同様に原資料が存在せず、確認できない場合は、「同記述による」と表記する。
13　「駒込館」チラシ、演博所蔵分8頁所収
14　「広尾キネマ」チラシ、演博所蔵分7頁所収
15　「上野鈴本キネマ」チラシ、演博所蔵分24頁所収

16　広告「大蔵直営広尾キネマ」『時事新報』1925 年 3 月 6 日、演博所蔵分 30 頁所収

17　拙稿「草創期映画興行の志向性―駒田好洋の地方巡業をめぐる一側面」『文部科学省　私立大学学術研究高度化推進事業　学術フロンティア推進事業「日欧・日亜比較演劇総合研究プロジェクト」成果報告集』早稲田大学坪内博士記念演劇博物館、2008 年、136–144 頁

18　注 5 に同じ。

19　駒田の回想によれば、このとき上海と天津で入手した映画は、「征服の力」「懐しの泉」「女を征服する力」「海の雄叫び」「餓鬼娘」「默示錄の四騎士」「ゼンダ城の虜」「北海の秘密」「マイボーイ」「赤熱の十字架」「復讐のアルプス」「明滅の燈臺」の十二作品である。ちなみに現在、演劇博物館が所蔵する、セカイフイルム社寄贈のプリントは、『世界の心 *Hearts of the World*』（D.W. グリフィス監督、1918 年）、『闇の力 *Die Macht der Finsternis*』（コンラート・ヴィーネ監督、1924 年）、『野鴨 *Das Haus der Lüge*』（ルーブ・ピック監督、1926 年）の三作品である。これらも同様に、中国経由で輸入されたプリントの可能性もあるが、その調査は稿をあらためたい。なお『世界の心』については、国活も 1919（大正 8）年に『世界の人々』のタイトルで輸入している（「グリフィス第三次大作『世界の人々』国活に輸入さる」『活動画報』3 巻 6 号、1919 年 6 月、49 頁）。

20　「セカイフヰルム提供の「昭和の輝き」映畫」『日本興行新聞』1927 年 3 月 19 日、演博所蔵分 84 頁（同記述による）

21　広告「殉職美談　河西訓導」『東京演芸通信』1927 年 6 月 2 日、演博所蔵分 86 頁（同記述による）

22　「協会に対抗して新組合蹶起す」『やまと新聞』1925 年 8 月 20 日、演博所蔵分 48 頁（同記述による）

23　牧野前掲稿、1986 年、3 頁

24　『日本映画事業総覧』大正十五年版、国際映画通信社、1925 年

25　『国際映画年鑑』昭和九年版、国際映画通信社、1934 年、391–392 頁。全日本映画業組合の事務所は、セカイフイルム社と同じ住所であった。ちなみに、セカイフイルム社の検閲代行について指摘している牧野前掲稿や、同『日本映画検閲史』（パンドラ、2003 年）にも、日本映画業組合については言及されていない。なお、『国際映画年鑑』昭和九年版にみられる組合員は以下の通りである。

△岩岡商會（岩岡滋博）△岩松洋行（土肥武雄）△東和商事合資會社（川喜多長政）△東京實業商會（吉田淺吉）△中央映畫社（中曾根丈衛）△千代田洋行映畫部（大長庫吉）△千葉映畫製作所（千葉一郎）△大藏興行本部（大藏貢）△オールキネマ社（永井勇吉）△臺灣シネマ商會（古澤伸一）△中谷事務所（中谷義一郎）△中村商會教育映畫部△エデンシネマ社△中村義明商店（中村義明）△株式會社長瀬商店（長瀬德太郎）△孔雀活動カメラ店（中村辰之助）△合資會社ヤマニ洋行（片山三四造）△丸茂電機製作所（丸茂富治郎）△フヂワラ・フイルム・ラボラリー（藤原幸三郎）△合名會社高密工場（堀熊三郎）△テラオ映畫商社（寺尾勇次）△旭光學工業合資會社（梶原熊雄）△愛知商會（山梨靜宏）△赤澤キネマ本部（赤澤大介）△三映社（大津淳吉）△三國貿易株式會社（三浦鼎）△合資會社三益商會（淺羽璋亮）△水中商會（水中正憲）△モリモト映畫本社（森本豊吉）△セカイフイルム社（駒田好洋）△杉山映畫製作所（杉山大吉）

また設立翌年の 1926 年の時点では、桑野商会の桑野止也、カノー・フイルム商会の藤岡與市、岡本洋行の青地忠三、小松商会の齋藤幸太郎、東京シネマ商会の芹川政一、日本フイルム協会の杉田亀太郎らも、名前を連ねていた（『日本映画事業総覧』昭和二年版、国際映画通信社、1926 年、601 頁）。

26　演博所蔵分に収められた記事は、次のように述べている。

去る十四日朝日新聞會議室に組合側を代表し駒田好洋氏杉山大吉氏協會側よりは田尻種經氏新聞社側より代表者寄りて協議の結果、従來協會對組合の間には種々軋轢があり互に相反目し合つてゐたように傳えられてゐたが、此れでは此の國家的大事業を完成せしむる上に隱當でない宜しく一致團結すべしとの議起り茲に　御大喪　儀活動寫眞謹寫團本部が朝日新聞社内に設立され駒田好洋、田尻種經の二氏がその總務になつて活躍中である、組合並に協會側の顔ぶれは既に報道せる如くで新聞社撮影班は東京朝日東京日日、報知、國民、時事及び帝通、電通の七社である

（「組合、協会、新聞社合体して御大喪儀活動写真謹写団成る」『活動新聞』1927 年 1 月 22 日、演博所蔵分 78 頁（同記述による））

同記事によれば、全日本映画業組合と大日本活動写真協会の撮影機が各三台、新聞社が計五台の割当だったという。

27　高橋邦太郎「映画博物館（一）」新田所蔵分所収

28　高橋邦太郎「映画博物館（二）」新田所蔵分所収